

**キリスト教主義学校中学・高校生
クリスチャンの「キリスト教におけ
る宗教性」と援助行動との関連**

松島 公望(東京学芸大学)

日本心理学会第71回大会ワークショップ

2007年9月18日(火)

「キリスト教における宗教性」

(→以下, 単に「宗教性」と記す)

「個人がどの程度キリスト教的であるか」
を測定する指標である。

個人がキリスト教についてどの程度

①信じるのか(認知), 感じるのか(感情) = **宗教意識**

②振る舞うのか(行動) = **宗教行動**



宗教意識と宗教行動を包括する枠組が「宗教性」である。

「宗教性」

Glock (1962) が提示した5次元が重要な指標

→多くの研究者によって引用されている
(Hill & Hood, 1999; 杉山, 2004など)。

Glock(1962), Verbit(1970)

◆信念

◆行動

◆体験

◆効果[報酬・責任]

◆知識

◆共同体

「宗教性」概念とは

宗教意識	認知的成分	信念, 知識	効果 [報酬, 責任]
	感情的成分	体験, 共同体	
宗教行動	行動的成分	行動	

- ◆本研究は、「宗教性」の概念内容を**プロテスタント・キリスト教に焦点化**し、研究を進めていくものである。

援助行動の定義

■ 援助行動とは

「外的な報酬や返礼を目的とせず、自発的に行われた、他者に利益をもたらす行動(松井,1998)」と定義される。

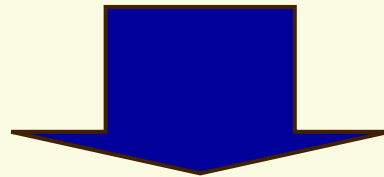
■ 向社会的行動の一種でその日常的な典型例として用いられている(杉山,1992)。

【援助行動の分類(Benson et al.,1980)】

① **自生的行動** = 緊急時等の即時的な状況要因の影響を強く受ける。

② **非自生的行動** = 個人内要因に深く関わる。

- **「宗教性」**=パーソナリティや価値観などとともに、**非自生的行動を生起させる個人内要因**に位置づけられる。
- **個人内要因としての「宗教性」**=長期的な時間的スパンのなかで発達し、その時間的スパンのなかで**非自生的行動としての援助行動の発達に影響を及ぼす**と考えられる。



「宗教性」=長期的な時間的スパンおよび**個人内要因**を重視する**発達モデル**(岩立,1995)の**1要因**として位置づけられる。

「宗教性」と援助行動との関連に関する研究

【日本】

「宗教性」と援助行動との関連を調べた研究はみあたらない。

【欧米】

数多くの研究が存在し（Batson et al., 1993; Spilka et al., 2003を参照），**両者の間には概ね関連がある。**

- 欧米でも、大学生と成人を対象とした研究が大部分を占め（Batson et al., 1993），**高校生を対象とした研究もほとんどない（Sam & Gustavo, 2005など）。**

中学生(青年期前期)まで対象を広げ、「宗教性」が援助行動に与える影響を発達の観点から検討する必要がある。

目的

- ◆ キリスト教主義学校における中学・高校生クリスチャンを対象として、「宗教性」と援助行動との関連について検討する。

【クリスチャンについて】

- ①自分がクリスチャンであり、家族にもクリスチャンがいる群 (Ch-Ch群:二世)
- ②自分がクリスチャンであるが、家族にはクリスチャンがいない群 (Ch-NCh群:一世)

仮説

[仮説1] クリスチャンの「宗教性」は援助行動に影響を及ぼし、「宗教性」の高いクリスチャンは積極的に援助行動をとるであろう。

※学校段階よる「宗教性」の援助行動に対する影響の違いについては、探索的に検討することとする。

方法

【調査対象者】

①Ch-Ch群；中学生45名，高校生26名。

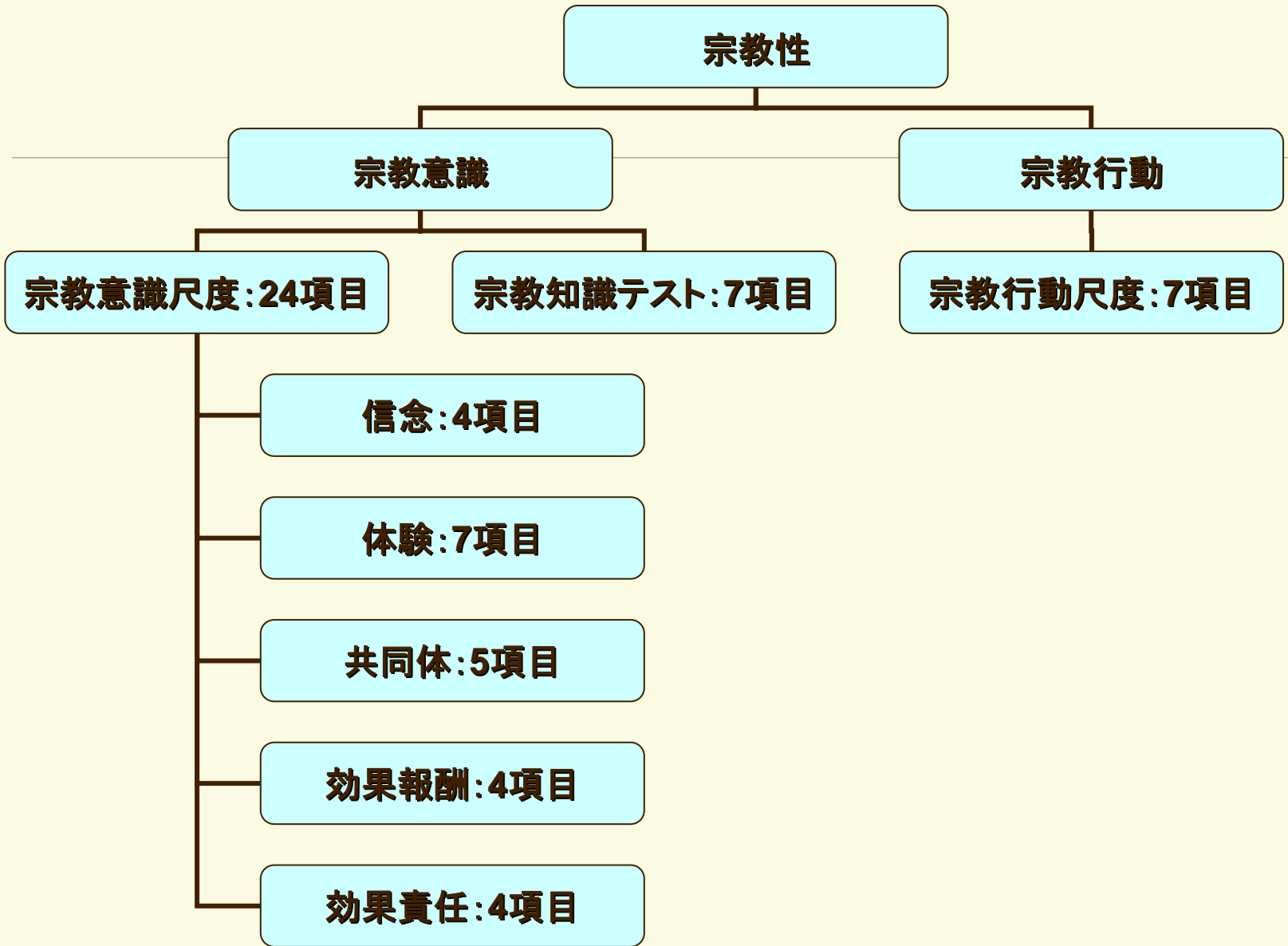
②Ch-NCh群；中学生56名，高校生56名。

【調査時期】 2002年8月～12月

【手続き】

個別記入方式による質問紙調査を行い，集団で実施した。

【質問紙の構成】 松島(2007)による **中高生版宗教意識尺度** (24項目)，**宗教知識テスト** (7項目)，**宗教行動尺度** (7項目)，**援助行動尺度** (16項目) を使用した。



結 果

- ◆「宗教性」各次元の分類については、各尺度を**得点分布の2分の1ずつ**に分割。
→【**低群**】，【**高群**】として設定した。
- ※**Ch-Ch群(71名)**および**Ch-NCh群(112名)**における各群の人数は**Table 1**に示した。

Ch-Ch群およびCh-NCh群において、「宗教性」と援助行動との関連を検討するために、**援助行動尺度得点を従属変数**として**2要因分散分析**を行った(**Table 2参照**)。

Table 1 Ch-Ch群およびCh-NCh群の「宗教性」各群の人数

	クリス チャン別	中学生			高校生		
		低群	高群	合計	低群	高群	合計
信念	Ch-Ch	10	31	41	8	18	26
	Ch-NCh	35	20	55	37	17	54
体験	Ch-Ch	11	32	43	10	16	26
	Ch-NCh	31	25	56	40	14	54
共同体	Ch-Ch	15	28	43	8	18	26
	Ch-NCh	34	21	55	40	15	55
効果報酬	Ch-Ch	15	29	44	11	15	26
	Ch-NCh	33	23	56	38	16	54
効果責任	Ch-Ch	10	34	44	10	16	26
	Ch-NCh	26	29	55	46	10	56
知識	Ch-Ch	20	25	45	11	15	26
	Ch-NCh	28	28	56	24	32	56
行動	Ch-Ch	9	36	45	11	13	24
	Ch-NCh	32	22	54	45	10	55

注1. Ch-Ch:クリスチャン・クリスチャン家族群, Ch-NCh:クリスチャン・非クリスチャン家族群

注2. 各群の得点分布(点)

[信念]低群:4-12, 高群:13-24

[体験]低群:7-23, 高群:24-42

[共同体]低群:5-17, 高群:18-30

[効果報酬]低群:4-15, 高群:16-24

[効果責任]低群:4-12, 高群:13-24

[知識]低群:0-4, 高群:5-10

[行動]低群:7-18, 高群:19-39

Table 2 Ch-Ch群およびCh-NCh群の各群における援助行動尺度得点の平均値(標準偏差), 人数, 分散分析結果

	クリス チャン別	中学生		高校生		主効果[F値(自由度)]		交互作用[F 値(自由度)]
		低群	高群	低群	高群	学校段階	低群-高群	
学校段階 × 信念別	Ch-Ch	35.22(8.71) 9	40.86(11.95) 29	35.43(12.71) 7	31.44(13.61) 18	1.67 (1,59)	0.05 (1,59)	1.82 (1,59)
	Ch-NCh	35.49(11.14) 35	35.68(10.73) 19	38.91(14.32) 35	41.88(16.63) 16	3.12 (1,101)	0.34 (1,101)	0.26 (1,101)
学校段階 × 体験別	Ch-Ch	36.00(10.19) 10	40.23(11.54) 30	28.33(8.35) 9	34.94(15.04) 16	3.82 (1,61)	2.67 (1,61)	0.13 (1,61)
	Ch-NCh	34.53(11.75) 30	37.16(9.75) 25	39.16(14.91) 38	41.85(15.60) 13	2.87 (1,102)	0.94 (1,102)	0.00 (1,102)
学校段階 × 共同体別	Ch-Ch	36.36(10.59) 14	40.69(11.49) 26	35.43(12.71) 7	31.44(13.61) 18	2.31 (1,61)	0.00 (1,61)	1.54 (1,61)
	Ch-NCh	31.91(9.74) 33	41.76(10.24) 21	38.00(14.93) 38	46.64(14.74) 14	4.31* (1,102)	12.26** (1,102)	0.05 (1,102)
学校段階 × 効果報酬別	Ch-Ch	35.93(9.68) 14	41.63(12.14) 27	28.70(12.75) 10	35.13(13.33) 15	4.72* (1,62)	3.69 (1,62)	0.01 (1,62)
	Ch-NCh	33.56(9.85) 32	38.74(11.71) 23	38.83(14.54) 36	44.47(16.96) 15	4.18* (1,102)	4.04* (1,102)	0.01 (1,102)
学校段階 × 効果責任別	Ch-Ch	31.22(6.63) 9	41.09(11.35) 32	31.89(13.18) 9	32.94(13.67) 16	1.29 (1,62)	2.74 (1,62)	1.79 (1,62)
	Ch-NCh	31.84(9.37) 25	39.62(10.71) 29	38.14(14.36) 43	48.40(16.63) 10	7.19** (1,103)	10.29** (1,103)	0.19 (1,103)
学校段階 × 知識別	Ch-Ch	37.70(11.44) 20	41.00(11.67) 22	39.50(16.26) 10	27.93(8.53) 15	3.49 (1,63)	1.88 (1,63)	6.07*a) (1,63)
	Ch-NCh	32.89(9.07) 27	38.46(11.89) 28	45.00(18.75) 23	36.30(10.65) 30	4.05* (1,104)	0.40 (1,104)	8.35**b) (1,104)
学校段階 × 行動別	Ch-Ch	35.11(9.65) 9	40.61(11.86) 33	35.27(14.72) 11	29.38(11.87) 13	2.69 (1,62)	0.00 (1,62)	2.85 (1,62)
	Ch-NCh	30.77(8.61) 31	41.64(10.56) 22	36.52(12.44) 42	55.00(17.97) 10	13.25** (1,101)	31.23** (1,101)	2.10 (1,101)

注. Ch-Ch: クリスチャン・クリスチャン家族群, Ch-NCh: クリスチャン・非クリスチャン家族群

a) Ch-Ch : 単純主効果の検定 [学校段階] 高群: 中学生 > 高校生** [低群-高群] 高校生: 低群 > 高群*

b) Ch-NCh: 単純主効果の検定 [学校段階] 低群: 高校生 > 中学生** [低群-高群] 高校生: 低群 > 高群*

* $p < .05$ ** $p < .01$

【有意な主効果のみられた分散分析結果】

*Ch-Ch*群(二世)

- ◆ 学校段階

高校生

< 中学生

「学校段階 × 効果報酬別」

*Ch-NCh*群(一世)

- ◆ 学校段階

高校生

> 中学生

- ◆ 低群—高群

高群 > 低群

「学校段階 × 共同体別」

「学校段階 × 効果報酬別」

「学校段階 × 効果責任別」

「学校段階 × 行動別」

「学校段階 × 知識別」→ 交互作用: 単純主効果の検定

*Ch-Ch*群(二世)

◆ 学校段階

【高群】:

中学生

> 高校生

◆ 低群—高群

【高校生】:

低群 > 高群

*Ch-NCh*群(一世)

◆ 学校段階

【低群】:

中学生

< 高校生

◆ 低群—高群

【高校生】:

低群 > 高群

考 察

Ch-Ch群：仮説は支持されなかった。

- 「宗教性」は援助行動を生起させる個人内要因として捉えられている(Benson et al.,1980)

→Ch-Ch群では**必ずしもそうではない可能性。**

■この結果は、「宗教性」の高いCh-Ch群が**非援助的だということ**を意味しない。

■中学生では、Ch-NCh群よりCh-Ch群の方が援助行動の平均値が高い群も存在しているからである。

Ch-NCh群：仮説は支持された。

- Ch-NCh群では、青年期の前期から中期にかけて「**宗教性**」の一部が**社会との関わり**のなかで発達する可能性が示唆された。

この点については、社会に対する望ましい行動＝援助行動を、**彼らが自らの信仰や教義を実践する機会**として捉えているとの仮説が考えられる。

【Ch-NCh群：本研究の結果から】

- ①教会生活・学校生活およびクリスチャンの友人との関わりの高さ(共同体)
- ②教会や学校との関わりから来る安心感の高さ(効果報酬)
- ③教会出席, 奉仕に対する義務の高さ(効果責任)
- ④教会出席を始めとする宗教行動の高さ(行動)

→援助行動を積極的にとる要因となっている。

彼らにとっての援助行動は、「宗教性」の高さに基づく社会的行動の可能性がある。

Ch-Ch群(二世), Ch-NCh群(一世)共に「知識」のみ有意な交互作用がみられた。

- [1] 一世, 二世共に, 高校生では基督教の知識が援助行動に正の影響を与えるものではない。
 - [2] **二世の基督教の知識が高い群**では, **高校生よりも中学生のほうが援助行動を積極的にとる結果**となった。
- **「知識」においてのみ, 学校段階による援助行動に対する影響の違いがみられる。**

二世の中学生においてのみ基督教の知識が援助行動に影響を与えるが,

一世においても二世においても, 高校生にとっては直接影響を与えるものではない。

本研究の結論として...

- Ch-Ch群, Ch-NCh群共に, 学校段階よる「宗教性」の援助行動に対する影響の違いはみられず

援助行動については, Ch-Ch群であるかCh-NCh群であるか(家族にクリスチャンがいるかいないか)の違いが大きく関与することが示唆された。